

江蘇省郷鎮地名誌

(蘇州市)

藤島範孝

そしゅうし 蘇州市 (苏州市) Sūzhōu Shì スウチョウ。蘇 (江蘇省及蘇州の簡称)。華南音suzhou, 粵音Sou'zau', 潮汕方言Sūzhōu。ム×出ヌ 戸。吳 (別名)。姑蘇 (古名)。

【行政】江蘇省の区級市。蘇州市は4区 (滄浪, 金閶, 平江, 郊区)。3市, 県級市 (常熟・昆山, 張家港) と, 3県 (吳, 太倉, 吳江)。21街道弁事處。344の居民委員会, 4郷69村民委員会を管轄している。〒21500。TEL01512。蘇州は一般に府名として用い, 今は吳県の通称としても用いる。

【位置】江蘇省南部, 長江三角州中部。東に長江, 東南には上海市の嘉定, 青浦の2県と浙江省嘉興, 湖州の両市に接している。西は無錫市と太湖へ繋がる。俗に「蘇州は長江を枕にしている」と謂う。E120°10'~121°21'。N30°46'~32°02'。蘇州市区の中心はE120°37'。N31°19'。

【面積】8,488km²。(市区面積119,12km²) (市街と郊区面積142.6K m²)

【人口民族】全市人口5,461,380人。(市区736,246人) 内農業人口4,211,410人 (市区農業人口86,836人)。民族数18。漢族 (99,8%)。蒙古 (Měnggǔ・モンゴル)。維吾爾 (Wéiwú'ěr・ウイグル)。苗 (Miáo・ミャオ)。彝 (Yí・イ)。壯 (zhuàng・チワン)。回 (Huí・ホイ)。滿 (滿州族・Mǎn・マン)。布依 (Bùyī・プイ)。朝鮮 (Cháoxiān・チョウセン)。侗 (Dòng・トン)。瑤 (Yáo・ヤオ)。白 (Bái・ペー)。土 (Tǔ・トウ)。哈薩克 (Hāsàkè・カザフ・ハザック)。傣 (Dǎi・ダイ)。水 (Shuǐ・スイ)。錫伯 (Xībó・シボ) の各族など。

【氣候】北亞熱帯湿潤モンスーン気候区に属す。年平均気温15.7℃, 1月平均気温2.5℃, 7月平均気温28℃, 年降水量1,100mm。初夏梅雨。夏秋に台風, 無霜日年230日前後。

【地形】長江三角州平原, 太湖平原の低平地に位置し, 平坦地多く, 湖沼河川内陸水路が網目状に発達。平均高度3~5m。太湖の湖区とその湖岸には東洞庭, 西洞庭, 七子, 玄墓, 天平, 靈岩, 郭尉, 南陽, 香山, 馬鞍山等の諸山は平均高度100~200mの丘陵を形成圍繞している。最高峰は穹窿 (きゅうりゅう) 山で341.7mである。長江に沿っての地形はやや高く京杭運河 (大運河), 塩鉄塘, 望虞河, 元和塘, 婁江 (りょうこう), 澚河, 吳淞 (ごしょう・ウースン) 江, 太甫江等河川が貫流している。これらの地区は川堤 (墩) を除くと平均5~7mの高さである。河川の他に太湖, 陽澄湖, 昆承湖等の内陸水面面積は, 総面積の25%を占めている。「水郷の里」といわれ「吳国の人水に勝てない」の古語がある。周囲全て水「人の一生は水が決める」の諺もある。ただ最近になって, 蘇州河の如く1920年頃より生活用水, 所謂都市用水が汚染され, 支流の14河川が悪臭を放すので, 工業廢水処理場と都市用水処理上設け, 浄化した水は直接長江へ排出する方法を採用し改良を加えている。蘇州河は全長125kmで, 太湖を

出て上海市の黄浦江へ流出している。水に恵まれている地方は同時に水害の危険もある常習水害地帯でもある。1991年江蘇省の興化市が、その7月に連続6面の大豪雨で湖水と化した。蘇州の旧市内は被害なかったが、城外の山塘街は河水に浸った。無錫市も水没した。7月8日太湖周辺の危機回避で秒速200m³の太湖の水を太浦河へ流出させた。同時に上海市長命で銭盛蕩大堤防を爆破した。淮河の周辺500余のダムは両岸に分洪区づくり（33の分洪区）滞水させた。もともと小湖埋立で農地化した地域なので滞水が容易であった。農村集落は土盛上の自然堤防を利用している。太湖では沿岸44ヶ所の排水口開き水位下げた。2万の工場が操業不能、20万戸の民家が浸水、100万を超える避難民が出た。水に恵まれる地域は水による被害も受けることになる。

【農業】水稲、小麦、油菜、棉花、野菜等が主たる作目。1年2～3毛作。2期作もある。湖沼利用の養殖業さかん。養蚕と養豚、「湖羊」という羊の飼育もさかん。「魚米と絹の里」ともいい。養蚕業も伝統産業の1つである。又、全国有数の果樹地帯、食用油の採油地でもある。

【漁業】内陸湖沼、河川に食用となる137種の魚類がすむ。俗に「年々有魚（余）」といい、魚と余が同音なので、魚が獲れるので生活に余裕があるという。養殖もさかんで、陽澄湖の清水大蟹、太湖の銀魚（白魚）、吳江の鱸魚が知られる。太湖では蓴菜（じゅんさい）も採れる。

【鉱業】石英砂岩、硅石、カオリン土、硫化鉄、銅、花崗岩等産する。

【工業】紡績、絹織（蘇州刺繍）、常熟レース。特に蘇州緋糸（けいし）といい絹地に色糸模様を織り出す伝統的手法に秀れている。なお、蘇州刺繍は「蘇綉」といわれ、両面刺繍に特色がある。考案は春秋の少し前と推定されている。北宋代には花卉の図案が主であったが、のち、花鳥、人物、走獣、風景が刺され、両面のことなる色彩や刺し方の研究も行われている。唐宋代から明清にかけて最も普及したという。中国4大刺繍（湖南湘刺繍、四川の蜀刺繍、広東の粵刺繍）の1つである。吳の王孫権（三国代）魏、蜀と天下争奪の際、軍用地図の必要から、丞相の趙陸の妹に、方形の絹布に五岳、河、海、海域、城郭、陳形を刺繍させた。これに発祥の地蘇州の名を冠せた。（王嘉「拾遺記」）。蘇州市区景德路の環秀山荘内に「中国蘇繡芸術博物館」がある。この山荘は庭園、亭（ちん）、樓閣が配置されてるが、展示品には乾隆帝の朝衣「彩繡竜袍」があり、「明黄緞」と称す。貢繡い、庫緞は皇室専用の鍛子（どんす）である。竜袍（lóngpáo）の周囲は黒地に金色の竜がどぐろを捲く所謂竜文様で、馬蹄袖肩掛けが青藍色となっている。竜袍（皇帝専用の刺繍服）は上下に分かれ、金竜刺繍が42個、金糸50グラム、1本糸直径0.45ミリの逸品である。明13陵の1つ定陵の出土という。他に万曆帝の孝靖皇后「金竜白子衣」の複製品がある。朱紅を主色として金糸と孔雀の羽糸刺繍である。文様は竜、雲、海、河、崖と花卉。襟の前後に百人の童子の遊ぶ姿を縫ってある。子孫万代と多福多寿を表現した。刺繍伝説に據ると周の太王は長男の泰伯と次男の仲雍を南遷させ、水路を掘り洪水域の水を太湖へ導いた。その時、開削船が蚊竜のおこす波風で転覆しないよう、船の舳先へ竜の頭を書いて笹込んだ。竜は互いに争わずの諺によった。水夫も両腕や肩、胸に九頭の竜を入れ墨するのも19竜紋といい、水中へ転落しても蚊竜に害されぬという。断髪文身とも関係あるという。人身の飾り竜と舟飾り竜、水中の蚊竜が彫刻と刺繍のはじまりといわれる。繊維業の他、化学、電子、計器類、服飾、食品加工、製紙、光学器の製造がさかんである。

【交通】滬寧（こねい）鉄路、京杭運河が水陸交通の大動脈。各県とは公路と内陸水路の運河で

結ばれている。特に、城南の滄浪地区は政治、経済文化の中心で水陸結節点をなしている。運河の埠頭やバスターミナルは南門大橋付近に集中している。城東北の平江地区は絹織物と手工業工場の集積地である。城西北の金閘地区は商業と観光用庭園のある景観地区である。中心の商業地は観前街、察院陽、南門と石路付近である。護城河以西の獅子山、何山、南の胥江、北の楓橋まで公路と水運が発達、新興工業団地、高層住宅値が拡張しつつある。

【名勝古蹟】呉王の諸樊が梅里（無錫市梅村）から、この地へ都を移した。周霊王12年呉子城をつくる。闔閭（こうりょ）の周敬王6年（B.C514）闔閭城つくう。闔閭は又閬門外（西門外）に氷室を設けた。冷蔵室である。息子の呉王夫差の青銅の氷鑑も発見されている。（高さ44.8cm、口径76.5cm、底径47.2cm）氷鑑とは食品冷蔵用の容器、宮廷の氷厨入れ、少量の食品を冷蔵した。氷鑑の中の方形の壺に酒入れたという。（越絶書、楚辞、招魂）。闔閭城はもとは板閬の土城、周囲47里。のち、石材で改築するが、五代の梁の竜徳2年（922）呉越戦で破壊される。宋、元代に大修理、明清に営繕。江南に於ける典型的城塞。城壁の一部は今も残る。秦代以降長期にわたり県治、群治、府治となり江南行政の中核都市で高度の文化を保持して来たといわれている。城西に姑蘇（こそ）山がある。蘇州別名を姑蘇という。市区の西北に虎丘山、東南に黄天蕩があり水路運河が蜘蛛の巣の如く張りめぐらされている。運河は街区を縦横に走り、各所に橋と埠頭を置いている。「江南水郷、上有天堂、下有蘇杭」と表現される。周囲を護城河、東西に3流、南北に4流、中に1流あって水路の幹線をなしている。各れも京杭大運河と西の太湖へ出れる。東は呉淞江を経て中国海へ出る。橋数180本。1kmに15の橋架るといふ。石橋では中国最長の連拱橋もある。一名宝營橋。城内から東南8km、大運河と澹台湖を繋ぐ玳玳河に架かる。全長300m花崗で53孔のアーチ造り。一方中国で最小橋の単拱橋も網師園にある長さ2mで五歩で歩けるので「五歩橋」ともいふ。蘇州の庭園は俗に500という。留園、西園、拙政園、網師園、滄浪亭、獅子林が表である、又、太平天国の忠王府、虎丘の雲岩塔、寒山寺、瑞光寿塔、玄妙觀三清殿、宋台石刻天文図、地理図、平江図等は省の文化財でもある。

【地名史】商代（殷）黄土高原に周部族が君臨。族長の周太王を古公亶（たん）という。太伯、仲雍、秀歴の3人の子がいる。古公は季歴を後継者とする。太伯と仲雍は江南で土豪となる。断髪文身して首領となり「勾呉」の国建てる。のち、呉国とする。1954年鎮江市の東30kmの大港の煙墩山より、西周早期の青銅器、原始瓷器など発見さる。この中宜侯矢という盛器（簋）の底に126文字の銘文あり、うち118字解読、4代目の仲雍が矢（周章）宜侯に封ぜらるとある。付近宜侯矢の領土。簋は古く中原産で、同時発見の青銅器類は江南特産と知れる。揚州の儀征の破山口より出土した青銅器と安徽省南部の屯溪から発見された青銅器は各れも西周代のもので、呉文化は中原文化と荆蛮文化の融合を示してしると謂う。呉文化は青銅文化である。中でも江蘇省江察の発見（1915）の青銅は呉文化の代表といわれ、発見地の名を冠し湖熟文化という。呉は春秋代の有力国で、B.C514年頃宰相の伍子胥が、国王闔閭より地形測量、城塞の施工を命じられて、現地点に周囲24kmの闔閭城造成したといふ。蘇州は呉国の京師。闔閭城は8つの水陸城門持っている。西南の盤門（水路跨ぎ、水門と城内に築かれた陸門で形成）花崗岩と青煉瓦から成る。（現存は元代の改造500～600年の歴史もつ）城内部は扉を上下の開閉式石槽と紋関石で仕切り、城内は2重、前門と後門の間を瓮城という空間で、数百の兵が待機した。瓮城へ入ると前後扇戸を閉める。城壁と通路を経て城楼へ入ることができた。盤門外では

西北より大運河へ至る。両岸を繋ぐ虹形の橋は蘇州で最も高い呉門橋である。宋代建立の端光塘等有って盤門三景といい城門、橋、塔で組合さっている。第19代寿夢（B.C585～567）の時代、呉国繁栄。その子諸樊が無錫から移り蘇州を国都とする。その子闔閭代に更に強大国となったが、続く夫差は属国であった越王勾踐に敗れ蘇州の全盛が終焉となる。年代的には西周、春秋、秦、漢、三国、魏普と対峙して約1500年間蘇州中心の呉国が維持され、のちの江南文化の基層を形成した。江南文化は遺蹟の集積度合から見て、或は文化成熟度から考え、最初は南京、鎮江付近にあったものが、やがて、太湖周辺へ文化核が移り、後には更に東の蘇州を中心とする地域が繁栄したものと知れる。西周から春秋にかけての古代土墩墓が南京、鎮江に多く発見される。土墩は5～10mの盛土で所謂土饅頭である。ひろさは10～100km²。家族同葬で数人から数10人葬った。稀には1人。土墩から碗、湯呑みといった原始瓷器や茶碗とおぼしき硬質の陶器、炊事の窯跡から夾砂紅組陶が出土している。なお、この地方の地名に用いられる墩には堤防を指すこともある。各れにしても人口的土盛をいう。青銅器は古く貴族専用であったが、後に一般化した。古代青銅器酒器は「尊」といい鳥をトーテムとし鳳尊、鴨尊の器が残っている。これに書かれた装飾文字を「鳥虫書」という。戦国時代は越と楚に属し、秦代は会稽都の呉といい、呉県がおかれている。農民を指揮した陳勝の乱があり、続いて劉邦と項羽の両軍の反政府活動が活発となる。項羽は字名を羽といい楚の貴族の出身。叔父の項梁と名将項燕とともに蘇州起義（B.C209）を勃す。郡守を殺害（8000人の兵を集め）秦郡の南下を阻止したという。又、三国代は呉の孫権が呉郡を設けたのは蘇州である。普の咸和元年（326）には呉郡が呉国となる。南朝の梁の太清3年（549）簡文帝は呉州と改める。太宝元年（550）再び郡とする。南朝の陳の真明元年（587）再び呉州をおく。隋の開皇9年（589）地区内にある姑蘇（こそ）山から蘇州と改められる。行政上から初めて用いられる。原音は呉音の説がある。蘇は本来植物の名で紫蘇、白蘇（エゴマ）の蘇である。唐の武徳4年（621）江南道に属し、治所を呉県の長洲へおき、地区名を蘇州とする。開元21年（733）区分割して江南道を設ける。のち、治所もおく、元宝の初め呉郡とし、乾元の初め再び蘇州とする。五代目は呉越の国となる。呉越王踐鏐は蘇州を政治の拠点とし中呉府と称した。宋の開宝8年（975）平行軍をおき、政和3年（1113）平江路に昇格させ両浙路に属させる。蘇州の称を「平江」という起源である。元の至元10年（1276）平江路を改め江浙省に属させる。元末から明にかけて「水滸」を書いた施耐庵（1296～1370）は祖籍姑蘇とある。当時通用した地名と知れる明の初め蘇州府と改め南京（なんけい）を直隸とする。治所は呉県の長州におく。のち、蘇州へ移す。明の中期よりい手工業発達、商品経済発展し全国に30以上の大型都市誕生。多くは江南東海沿岸地方で、大運河沿いの水網交通発達地方であった。殊に蘇州は絹織物の機戸業がさかんで、数10人雇用企業が沢山あった。神宗の派遣した宦官が、この種の企業対象に「税監」おいて収税した。その税監が横暴したとって抵抗運動激しくなる。特に税監孫隆は新しい織機1台に銀3錢織物1匹の新税設けたことで反乱（1601）となり、全国数10ヶ所の織物都市の機織一揆となる。蘇州は一揆の拠点都市として知らされた。清に入り蘇州府とし江蘇巡撫の駐在地となり政治的都市の意味が強くなる。江蘇省に属し治所は呉県と長州と蘇州県に分けておく。1912年府を廢し呉県をおく。1934～37年無錫行政督察区に属する。1949年開放後、呉県城を分けて郊外に市区設ける。州專署の駐在地とする。1958年蘇州專区の管轄となる。1962年再び江蘇省の直轄。1983年

蘇州地区に吳，太倉，昆山，吳江，沙州の5県と県級市の常熟市を蘇州市へ併合。蘇州は史的な区分概念から吳郡，吳県，吳州，平江などの地域と重複し，蘇州の別称としても用いられる。

【蘇州語について】蘇州語は吳語（Wúyǔ）といい，蘇州土語や蘇白といわれる。一般に声音は清音で耳に快よく響くので吳儂軟語（Wúnóngruányǔ）という。上海語域と浙江省南部は蘇州語とともに吳音地域という。上海語は中国語方言中でも特有な言語という。六朝代孫権の吳国であったが，長江下流は諸外国との往来激しく独得の文化形成した。日本文化への影響も強いと言われる。吳音は日本語の古語と関係あるともいう。中国語普通語と吳語の一部を比較すると次のようなものがある。普通語「我」（ウオ）／吳語「哦」（ゴオ）。以下同様に「你」（ニイ）／「倪」（ニイ）。「俚」（リイ）／「奴」（ヌ）。「他」（タ）／「俚」（リイ）。「他們」（ターメン）／「奴」「篤」（リイドウ）。「花」（ホワ）／「霍」（フオ）。「橋」（チャオ）／「攪」（ジョオ）。「書」（シュ）／「世」（ス）等がある。意味としては一般語の「浜」（bāng）が，吳語では「河」となり小川や，クリークなどの地名用語として用いられている。「河」はhéで河川水路や黄河を表現するのだが，吳語では「浜」で用いる地名の渉度が高い，同様に「光火」が「怒」，「念頭」が「嗜好」，「張張」が「親戚友人を訪問する」となり，「灯炷」が「関店」。「有種」が「大胆，志ある」となる。「面湯」が「顔を洗う水」で，「日脚」が「生活ぶり」というような異義が見られる。又，濁音と母音に特有の吳音が残り，皮（パイ）は（パイ）といい，共（グン）は龔（ゴオン）。地（テイ）は邸（デイ）。求（チュウ）は菊（ジュ）という。吳語には8声調（陰平，陽平，陰上，陽上，陰去，陰入，陽入）があるが，現在の上海語には5つ，蘇州語には7つ残っている。解釈の異なるものには，「吃煙」（煙草をすう）が吳語では「休息」となる。「出客」（チュウユー・身なり綺麗）が美しく着飾ることであったり，「引針」（イエンシエン）が針であり，「做人」（ツォレン・Zuòrén）が節約だったりする。これら吳語と吳音が，この地方の地名に残した影響は大きい。

【蘇劇】蘇州では行われる地方劇を蘇劇という。蘇州灘簧（カ）ら発生したと言われ，蘇州の雜曲では蘇灘という。昆曲や京劇で蘇州語の科白を蘇白といっている。

【蘇広舗】蘇広舗（Sūguǎngpù）は蘇州や広州の品物を扱う店の名称，蘇州の絹織物や広東の所謂洋品を扱う店をこう呼称している。

蘇州市内地名

①かんぜんがい 観前街 Guanqian

蘇州市区の中中部，西は人民路と景德路に至る。東は臨頓路に達す。古建築の玄妙観前より街名となる。宋代に玄妙観を天慶観ともいっただので，天慶観前ともいう。観内には広く桃樹が植えられている。一斉に開花するので「燦若雲錦」といい周辺の雲が錦色になるほど鮮やかであるという。又の名を碎錦街とも呼称。元代に玄妙観と改める。玄妙とは奥深く微妙なること指す。のち，観前町を用いる。延長800m，幅員9m，舗装道，市区で最も繁華街。絹地，刺繍，白檀，扇子，蘇州胡筆，桃花塢産（木版画）等の商店並ぶ。茶館，食品店，装飾品，書店（新華）がある。「絹の里」とも謂われ絹製品の商品が中心的存在であった。元代には「織造局」があり，明代には「東北半城，万戸機声」といった表現が残っている。全国から徴収税金の20%が蘇州から納入していた。一方城内の人口の集積もさかんで食品工業も発達し，蘇州料理といい

陽春蕎麦，軟質の豆腐（頭腐腦），練小麦粉細長くする炸油(Zhàoyóu) 条，蝶の卵入れ春巻，木樨(Mùxī)の団子など食文化も隆盛を極めた。木樨団子は通称桂花，木樨印肉といわれた。又，松鼠桂魚・牡丹甲魚，蟹料理といった魚関係料理が知られる。観前街の南寄に料理店が集中，かつては乾隆帝が松鶴楼に立寄ったと伝えられている。

②けいとくろ 景德路 Jingde Lu

蘇州市区の中中部，西は金門口，東は人民路に至る。1926年に金門語，将郡廟前，珠明寺前，甲衙前，黄鵬坊等の街鵬の拡大を契期として景德路を街路とした。長さ1600m・幅9m，舗装。石路と観前街の繁華街と接す商業区である。市区中部を東西に貫く街道，郵便局大楼，刺繍研究所，病院等が並ぶ。

③さつじんじょう 察院場 Chayuanchang

蘇州市区の中中部，人民路と観前，景德路と交差する一帯。明代に都察院おく官吏の非行を弾劾し，各省を監督する職で，古くは後史台といった。今は街路入口に郵便局の大楼。商店，旅館などが並ぶ。

④しょうこうえん 小公園 Xiaogongyuan

蘇州市区の中中部，北局の周囲を指す。もと，荒蕪地。1921年より開発。市区最大の娯楽場となる。人民市場，映画館，書店，旅館がある。

⑤じんみんろ 自民路 Renmin Lu

蘇州市区中部，北は平門橋へ至る。南は人民橋へ出る。長距離バスターミナルと渡船棧橋がある。1949年旧平門路と獲竜街と三元坊を拡張した。延長5,000m，幅員32m，市区を南北に縦貫，市区の中軸。路面の大部分は花崗岩。北は西北町，車中市。中段は観前街，景德路，道前街，十梓街，南は十全街，新市路等交差している。飲馬橋の南には市政機関，蘇州医学院，蘇州中学や滄浪亭，文廟，工人文化宮がある。名勝地として北寺塔，怡園，鶴園，曲園などが並ぶ。

⑥とうごししょくちょう 東吳絲織廠 Dongwashzhichang

蘇州人民路にある。1918年の創建。絹織物特に緞子を生産。「塔天縐」や「古香緞」「克利緞」には伝統的手法用いている。緞(duàn)は鍛子(どんす)，或は緞子(どんす)と書き，絹糸を厚く織り艶を出す。南京，杭州とともに3大緞子産地，杭州ものは「別緞織錦」ともいわれる。「錦緞」，「素緞」とは無地の緞子を謂う。

〈平江区〉へいこうく 平江区 pingjiang Qu

蘇州市内の東北。南は干將路，鉄瓶港と滄浪区が境界。東は婁門外と官瀆里。西は永定寺弄。埃河沿と金閶区と接する。北は鉄道駅と斎門の洋涇塘まで。城河(濠)は，この東北地区を囲み，区内は内路河道を往来道としている。1949年区を設定。かつての平江路を平江区と改名。宋代や太平天国の時は蘇州よりも平江が一般的名称。面積8.4km²。人口173,812人。六街道弁事處を管轄している。絹工場，文化娯楽館，商店街の観前街，人民路，景德路，東中市と臨頓路が含まれる。絹織物企業としては東吳，振亜，光明，新蘇等が知られる。刺繍，紅木，王雕，檀香扇等の伝統工芸工場も多い。庭園では拙政園，獅子林，怡園，藕園，玄妙観，北寺塔，太平天国忠王府（現蘇州博物館）がある。区内の主要内陸水路は25河あり，延長は16kmに及ぶ。石橋の数60典型的水郷区である。

①りんとんろ 臨頓路 Lindun Lu

蘇州市の中央、北は東北街、南は千将路、春秋の王領兵が東夷征伐に征く時、この地に臨時駐頓し犒賞軍士といわれ路名となる。延長1,300m、幅員9m。南北交通の主要幹線。北端に獅子林と拙政園、太平天国忠府がある。1859年太平天国の李秀成兵を集結させ、江南大營を破り、蘇州と常州を占拠。1860年李秀成上海攻撃するも、外国軍の反撃で退却。蘇州へ戻る。のち、2回にわたり上海攻撃、各れも失敗。1862年曾国蘇率いる清軍と洋槍隊が三方よる太平軍攻める。洋槍隊に英人が登用されていて、淮軍には李鴻章がいた。1863年清軍蘇州常州を攻撃、太平軍の慕王や譚紹光は蘇州死守する。忠王李成内粉で投降。やがて、蘇州陥落、東南門より天京へ後退。太平天国軍の拠点が臨頓路でもあった。

〈きんしょうく〉きんしょうく 金閶区 Jinchan Qu

蘇州市の西北。石路、東中市、西中市、桃花塢大街、山塘街、楓橋鎮、彩香村等含まる。滬（こ）寧鐵路が区の北を横断。東は王天井閶と平江區に接す。南は通和坊、小日暉橋弄と滄浪區が境界。西は楓橋鎮。北は山塘、虎丘。區名は金門閶門から名をとる。面積13km²、人口199,871人、七街道弁事處を区政府管轄、商業と工業さかん。石路及び周辺の觀前町は商業區。全國に販路もつ薬店。食料品店がある。留園路、虎丘路、西園路、金門路、広濟路に庄延工場や動力機械工場が集中している。古蹟として西園、環秀山庄、虎丘、楓橋、寒山寺がある。なお、山塘町は古巷の風貌を残す景観地區となっている。

①さいこうそん 彩香村 Caixiang Cun 蘇州市の西南。胥門の外側。付近はかつて彩香浜前といった。吳の「浜」は海の傍の河で、河口であった。大型新村がおかれている。1982年着工。面積19万km²。人口1万人。汚染処理場、商店街、教育施設など敷地内に繰込まれている。

②さんとうがい 山塘町 Shantoang jie

蘇州市の西北。南は渡僧橋、北は虎丘に至る。延長3,800m、幅員2～3m。唐代開削の閶門から虎丘に至る内陸水路の河道。途中原山塘と白公路塘を通る。この河道運河を俗に「七里山塘」と呼称。略して山塘という。街道名は河道名を用いた。別に白公堤ともいう。かつて虎丘への往来に必ず通る道。河道に沿って商業栄え古蹟も残る。牌坊、石橋多い。閶門を経て虎丘へは江南の原風景といわる。住居は街路に面し河に背向けている。水郷では一般に住居は運河に面し「河枕」と称するが、山塘は街路側に入口がある。

③せきろ 石路 Shi Lu

蘇州市の閶門外。觀前街は商業、娛樂の中心で繁華街。閶門は閶闔（しょうこう）門の略で天上界の門を謂う。石敷になっている。宮殿の門までも石敷きと思われるので、石路の街路名となる。

④とうかおうたいがい 桃花塢大街 Taohuawu Dajie

蘇州市の西北。東は人民路に接する。西は桃花橋弄と接し宝城橋街に位たる。唐宋時代城北の隅にある閶門と齋門を桃花河が流下していた。河畔に桃樹が植えられていた。桃樹は神聖木であった。古く河畔を桃花塢といった。「塢」は小さい堤を指した。人口堤防である。延長800m、幅員4～7m。古い街路景観を遺している。木刻と年画で知られる明代の画家唐寅の居住地でもあった。「弄」(long)は上海市でいう露地、北京の胡同、華南でいう巷である。横道、脇道にも用いる。

⑤とうちゅうし 東中市 Dongzhongshi

蘇州市の西北部。西は皋橋に接する。東は人民路に接し白塔西路に至る。延長900m。幅員9m。商店街路である。西中市、白塔西路、白塔東路とともに市の北部を、東西に走向する主要街道の一つである。

⑥ふうきょうちん 楓橋鎮 Fengaiao Zhen

蘇州市閶門の西4km。楓橋路の南側。西京杭運河がある。無錫と蘇州をつなぐ主要水路が通る。旧名を封橋といった。のち、唐の詩人張継の詩「江風漁火対愁眠」より「楓橋夜泊」の語句が愛唱され、地名を楓橋とする。もとの封（fēng）と楓（fēng）は調和音であったため、改字した。橋名が楓橋となり、鎮名として用いられる。橋は鎮の東側にある。伝統的街路を残す中世的集落。近くに寒山寺、鉄嶺関の古蹟がある。

〈そうろうく〉 滄浪区 Canglang Qu

蘇州市区の1つ。七街道弁事處を管轄している。蘇州市の南部に位置する。区の北は干蔣路、鉄瓶篙、鎮撫司前、通和坊、金閶区、平江区などと接している。三面は河に囲まれ郊外区とも隣接している。区の面積は6.5km²。人口は216,514人、滄浪の地名は、区内にある滄浪亭から命名。蘇州大学、蘇州医学院、蘇州中学、工人文化宮、図書館、飯店、賓館などがある。古蹟としては滄浪亭、網師園、双塔、大成殿、瑞雲峰、無梁殿、盤門三景などがある。区内は人民路が南北に縦貫し、道前街、十梓街、十全街などが東西に走向し交差している。南門傍に長距離バスのターミナルと水路交通の運河棧橋が設けられ、水陸交通の結節的機能をもっている。主要な商業街道は人民路、胥門路、蘇門横街、鳳凰街、道前街などである。伝統的手工業の工場は胥門地区へ集中している。

①じゅうしがい 十梓街 Shizi jie

蘇州市区の東南部、滄浪区に属する。東は蘇州大学、西は人民路と接し道前街へ抜けている。古くは巖衙前、天賜庄と接続していた。1980年現名となる。延長1,500m、幅員9m。体育館、図書館、医院などがある。道前街、三香路とともに市の南部を東西に走向する主要街道の一つ。街名の「梓」は、とうきさげ（アツサ、あかめがしわ）樹種で、木材として器類をつくる。梓宮（しきゅう）とは天子の棺。文書を板木に彫ることを上梓（じょうし）するという。板木を梓板という。故郷のことを梓里という。四川省に梓潼という県名がある。粵音はZi²で華南ではTzyyと発音している。

②じゅうぜんがい 十全街 Shiquan jie

蘇州市区の東南部、滄浪区に属す。東は葑門、西は人民路へ抜ける。原名は十泉街という。10箇の汲揚口をもった井戸があったので街名にしたという。泉（quán）から全（quán）へ転訛。延長1,900m。幅員9m。網師園、蘇州飯店、南林飯店がおかれている。市の南部を東西に走向する主要街道の一つである。

③そしゅうだいいちしちょう 蘇州第一絲廠 Suzhou Di-1 Sichang

蘇州市の南郊外の南門路にある。1924年日本の蚕糸企業の片倉工業が創建。工業名を瑞豊糸廠といった。1937年華中蚕糸公司蘇州支店と改める。1945年中国蚕絲公司蘇州第一実験糸廠と改名。1951年現名とする。

④そしゅうだいがく 蘇州大学 Suzhou Daxue

蘇州市区の東部の天賜庄にある。東吳大学の跡地。南に将門，北に相門がある。東側に城壁が残る。1953年東吳大学，無錫教育学院，江南大学などの大学の学部の一部を移し構成した。初めは江蘇師範学院という。1982年蘇州大学とし，省に属する総合大学とし文理科10系をつくる。研究所，研修所，通信教育制度などを持っている。

⑤そしゅうちゅうがく 蘇州中学 Suzhou zhongxue

蘇州市人民路の南端にある。光緒13年(1904)紫陽書院を設け，江蘇師範学堂とする。1912年江蘇省立第一師範学校。1927年7月江蘇省立第2中学，江蘇省公立工業専門学校中等部などを併合し，江蘇省立江蘇中学とする。高中部，師範部及び附属小学を三元坊へつくる。初中部は草橋に，郷村師範部と附属小学は吳江へ置いた。1937年滬へ移校し，1941年宜興へ更に移り，武進に私立校を設立したりする。1945年再び蘇州へ戻り，改名し，1976年現名を用いる。

⑥そしゅうはんてん 蘇州市飯店 Suzhou Fandian

蘇州市区の十全街にある。敷地面積6万㎡。建築面積2万㎡。蘇州市地区最大の賓館，医務局，郵便局などの諸施設が設けられている。飯店はホテルで，飯館(Fànguǎn)が料理店である。ホテルの食堂は飯庁(Fàntīng)という。華南ではfannといい，粵音ではfan⁶である。賓館(Bīnguǎn)は賓客の宿泊所を指す。俗に「賓至如帰」といい，家に帰ったように感じるという意味がある。

⑦そりんぼうしょくちょう 蘇綸紡織廠 Sulun Fangzhichang

蘇州市区の南門外の人民橋近くに立地している工場。1897年に創建。蘇綸紗廠といった「綸」(lin.luen.loen⁴)は青色の糸繩か，釣竿の糸をいった。但しKwan.gwan¹と発音する時は頭巾を綸巾といたり，皇帝の言葉を綸音といたり。蘇綸綸紡の綸も本来の后者の音を用いべきで「綸巾」の部類である。ここでは10本の糸をより合わせる意味がある。織物で用いる「紗」は細い糸のことで，綸紗とは細い糸をより合わすことをいう。1931年現名となる。1947年には一部の工場で，蘇綸紡織染廠や蘇綸棉紡織総廠などの名称も用いていた。「紡織」とは紡績で糸をより合わせて織物にすることをいう。1982年現名に統一する。純棉，化繊紗線や白色坯なども製造している。「坯」(Pī)は生地そのものをいう。坯布(Pībù)は粗布を指している。半製品にも用いるが，織物では生地を採っている。

⑧どうぜんがい 道前街 Daoqian jie

蘇州市区の西南部。東は人民路と接し十梓街へ出る。西は紅旗橋と接し三香路へ抜ける。もとは，道前街と府前街，衙前関などと呼称されていたが，1980年拡幅工事に併せ一本化し，現名とする。古くは明清の按察使司（唐代設置の地方司法長官に近い官名で，治安，風致，非法を檢察した。）が設けられていた。延長1,100m。幅員9m。三香路と十梓路を組合せ，市の南部を東西に走向する主要街道の1つとした。

⑨なんりんはんてん 南林飯店 Nanlin FanDian

蘇州市区十全街の北街にある。1956年の創建。この地はかつて南林邨(村)であったが，整地されて飯店用地となる。併設して，南園賓館がある。

〈こうく〉 郊区 Jian Qu

蘇州市の郊外区。蘇州市区の周囲。1951年郊外の田園が区となる。吳県以下11郷と虎丘鎮が含まれている。1954年吳県の楓橋区，木瀆区斗木瀆鎮を編入する。1956年には蘇魚郷も併合する。

しかし、1958年には区を廢止し、大部分を吳県とする。同年末再び区を設け郊区とする。面積114,7km²。人口105,362人 区の管轄は4郷、区内耕地、疎林の地、水面池塘などに4万畝の畠がある。水稻、野菜が主要作物。野菜は100余种あり蕩田に椒白(jiāo.サンショウ)植えることが多い。他に藕(ǒu.レンコン) 慈姑(cigu.クワイ. 茨菇. 茨菰)がある。水生植物としては鷄頭(jītóu.オニバス)の実、(かたくり粉)や紅菱がある。藕は蓮根。藕梢(オウスアオ)という若芽も食用とする。河南省鄭州市大河林遺蹟より5000年前(新石器)の栽培跡発見されている。秋には蓮の実を摘む。李白は「越女詞(うた)」で「耶溪(やけい)採蓮女、見客桿歌(とうか)回、笑入荷花(かか)去。伴(いつわり)羞不出来」と詞っている。よく「江南に蓮を採るべし、蓮の葉の何ぞ田田たる」ということで「蓮田」という。蓮実(蓮実)は生薬の一つ。氷砂糖入れ「氷塘蓮子湯(bīngtánlián)つくり、暑さ負けに効ある。李時珍の「本草綱目」に百病退去とある。冬水涸れに蓮根掘る。貯蔵むずかしく、すぐ販売する。砂中では2ヶ月貯蔵できる。蓮根は尾に特味ありと、細い尾を賞味する。なお、連花(liánhuā)に別名があり、水芙蓉、水華、王環などともいう。「詩経」に「菡萏(かんだん)」とある。宋の周敦頤(しゅうとんい)の「愛蓮説」には「菊花は隱逸なる者なり、牡丹は富貴なる者なり、蓮花は君子なる者なり」とある。農曆の6月24日は蓮花の誕生日として祝う風習がある。周敦頤は「染泥より出て染まらず」と賛辞おくっている。蓮の葉は「荷葉」、種を「蓮子」、地下茎を「藕」といい、別名の中に前記以外「芙蓉」「芙蕖」「菡萏(hàndàn)」がある。蓬菜は藕のことである。蓮の実は「蓮蓬(liánpéng)」ともいう。蓮塘(蓮池)があつて「蓮船(liánchuán)」があるのも江南の風物である。蘇州の丘陵地は桃、梨、橘(みかん)、楊梅(山もも、実は食用と染料)などの果樹と茶樹がある。「茶花」種類多く800年の歴史ある。茉莉、蘭、玳玳(だいだい)の種が代表。虎丘に栽培地集中「花郷」という。茶花は「花茶」ともいう。製法から最初「散茶」で、次に「餅茶」のうちの「団茶」となる。明代に竜鳳団茶の製造を皇室が禁じ、散茶が貢茶(進貢用)となり、新製品として「花茶」がつくられた。創始者は元代画家の倪雲林(げいうんりん)という。初め「蓮花茶」で、蓮の花乾かし錫容器に入れた。明代文人自ら花茶入れるのを優雅とした。画家徐謂花を茶へ直接入れた。(錫容器用う)。当時花茶には梅、蘭、木犀、菊、蓮、茉莉花、浜梨、玫瑰(バラ)、橘、くしなし、もっこうなどがあつた。清代には複雑な流通路を取り、大量生産された花茶が、華北、東北、西北へ拡大された。特に北京では「香片」といい茶館ができる。四川の成都にも前後して出現。長い冬の地方で花茶好まれる。蘇州郊区はまさに花茶の歴史を背景に成長した地区である。俗に蘇州茶区とさえいわれる。又、内塘(湖)内では養殖もさかん。金鷄湖と独墅湖の淡水魚は知られる。史蹟としては虎丘、靈岩、天平、杏春橋、越城遺蹟、駅亭、唐寅の墓、横山下の革命烈士の墓がある。伝統工芸、冶金工芸に秀ぐれた工場があるが、近況で述べる。

①おうとうちん 横塘鎮 Hengtangzhen

蘇州市郊区の横塘郷人民政府の所在地。市区の西南3km。京杭運河と横塘河(胥江)との合流地。無錫から蘇州への街道が通る。もとは渡船場。のち、橋架けられ橋名を鎮名とする。人口3,300人、紡績、陶器、建材、食品、硝子の工場がある。硝子は玻璃(bōli,はり)と書くが、もとは梵語の水晶である。古蹟として明代の彩雲橋と駅亭と南2kmの上方山に宋代の杏春橋残る。東南2kmに越城遺蹟がある。

②こうきでん 玫瑰田 Meiguitian

蘇州市区の西北2 km。虎丘の東南麓，虎丘への往来路，郊区の虎丘郷に属する。玫瑰はバラである。茶花原料栽培地で「茶花郷」という。

③しんかくちん 新郭鎮 Xinguo Zhen

蘇州市区の西南3 km。新郭港の南岸。西南に石湖がある。郊区横塘郷に属する。隋が平定し，のち，陳となり江南は服従せず。文帝が揚素を行軍総官して兵を南下，追撃して吳県へ入る。開皇11年（591）横山の東へ新城（郭）つくる。唐の武徳年間より旧治所の外城の1つとして遺る。人口1,300人。集落は河に沿って矩形。「郭（guō）」は郭（kuò）で外柵，城壁の外をいう。華南ではguoといい，粵音でgwok⁸で国と同音である。

④だいとうり 大蕩里 Dadanli

蘇州市の東南3 km。黄天蕩の西南岸。郊句の婁葑郷に属する。近くの大蕩より地名となる。「蕩（dàng）」は浅水の湖をいう。華南ではdanq⁸といい，粵音でdong⁸といい湖沼をいう。人口4,800人。大蕩藕と称すレンコン産地。

⑤ちょうけいびょう 長涇廟 changjing miao

蘇州市郊区の長青郷人民政府の所在地。市区の西北6 km。長涇塘の湖畔。長涇塘とも書く。「涇」も「塘」も泥水。西南に滬寧鉄道がある。「塘」名が廟名になったという。人口500，農機，化学，織物，刺繍の工場がある。鎮では茶華の栽培と加工がさかんである。

蘇州市の庭園

①ししりん 獅子林 shiziling

蘇州市区園林路にある庭園。元の至正2年（1342）天如禪師，師であった中峰国師の菩提正宗寺として創建。獅子林とのち命名す。最初は寺院，のち，花園，中峰国師は天目山の獅子岩で結茅したので，園中の石を獅子形にする。経文にも「獅子座」の意味を責めてある。園内東南に山，西北に水，假山と洞穴による構成。建築物として真趣亭，問梅閣，飛瀑亭，臥雲室，五松園，指柏軒，燕誉堂などがある。廊下の壁に「听雨楼帖」と石刻があり，文天祥の梅花詩碑亭がある。省の文物保護を受けている。

②そうろうてい 滄浪亭 Canglangting

蘇州市区人民路東側。古く五代吳越の広陵王踐元璟の花園。北宋の慶歴4年（1044）詩人蘇舜欽が水建亭とする。その時の詩「漁夫」の「滄浪之水」から滄浪亭と命名する。南宋の時金に抵抗した將軍韓世忠の邸宅にもなった。清の咸豊年間乱入した清軍により毀さる。同治12年（1873）再建。園内は假山が中心。山景水景の組合わせ。園内に面水軒，明道堂，五百名賢の祠がある。蘇州の園林中野趣あるという。省級の文物保護の対象となっている。

③だいえん 怡園 Yiyuan

蘇州市区人民路。清の同治，光緒年間の建築物。もとは清代官僚顧文彬の花園。東と西に建物区分けされ，中を廊下で結ぶ。東には軒館と回廊。石郭听室，拜石軒，四時瀟酒亭，石舫などある。西には池。池を中心として周囲假山。花木ある。壁に「園法帖」が嵌込まれている。歴代の書道家石刻ある。省級の文物保護の対象となっている。

④りゅうえん 留園 Liu Yuan

蘇州市区閶門外の留園路にある。明の嘉靖年間建てる。当時東園という。清の嘉慶年間劉蓉峰

が帰郷し、寒碧山荘と改める。俗に劉園といった。たびたびの戦乱にも毀されなかったので、とどまるという意味で、劉(liú)が留(liú)となる。園内は4景区に分かれる。中央假山と池、周囲に涵碧山房、緑荫軒、聞木樨香軒、清風池館など配す。東側は庁堂で軒庁、重楼なる送閣、曲院づくり四廊、峰石の配列、この中に五峰仙館、損峰軒、林泉耆碩之館、冠雲峰などあり「留園三峰」地区という。冠雲峰は宋代の「花石綱」の遺物で、江南の園林で用いる湖石でできた名峰の1つ。西側は土山楓林、自然景となる。北側は田園風景をかたちどり、盆景園となっている。園中は曲廊に據り結ばれている。廊下総延長700m。壁に史的な書と石刻が約300ほどある。「留園法帖」という。清代の江南園林の代表作。全国重要文化財施設となっている。

⑤もうしえん 網師園 Wangshi Yuan

蘇州市区の祥門内の闊家頭巷にある。後門は十全街。南宋の淳熙の初め史氏の「万巷堂」であった。史氏は号を「漁隱」といった。のち、荒廢。清の乾隆年間稗祿寺の少郷宋の地位にあたった宋元が再建。漁隱の意をくみ「漁翁」と号した。園の近くに「王思巷」があったので、王(Wáng)思師と似た音の網(Wǎng)思師へ変訛して網師園といわれる。園内3区分され、西側に邸宅。南に小山従桂軒、蹈和館、琴室などある。かつて、宴が催された。北側には五峰書屋、讀画軒、殿春移、集虚齋などあり園主は書齊医あった。中央は池を中心とし廊下、閣、亭、榭、岩石と曲橋、低い臨水面が造られている。射鴨廊、濯綏水閣、月到風来亭などが配置されている。古典的園林の代表作。全国重要文化財として保護されている。

⑥かんしゅうさんし 環秀山庄 Huanxiu Shanzhuang

蘇州市区の景德路にある。五代の吳越広陵王錢氏の金谷園の故跡という。宋代には樂園という。清の道光末に汪氏が荫義庄の一部を領有、環秀山庄とした。園内假山中心。造園の天才といわれた才裕良が清の乾隆年間改造修。蘇州湖石用いて、「独歩江南」の称がある。山中の峡谷、山上の栈道などと石洞石室が配置されている。南側に明の王鏊の祠堂がある。省の保護文物となっている。

⑦れいがんざん 靈岩山 Lingyan shan

蘇州市区の西南15km、木瀆鎮の近くにある。山に奇石多く、中でも靈芝石が突出。この石をの名を採る。春秋吳王夫差が宮室をこの地へ造る。西施をともに来訪。山頂に靈岩寺。これが夫差館娃宮の遺蹟という。寺は東晋に建てられたが、のち、戦乱に癩される。梁代再建し秀峰寺。唐には靈岩寺、明の初めの報国永祥禪寺という。今のものは1919~1932年の再建。山名を靈岩山寺とする。大雄宝殿と藏經楼がある。向って左側靈岩塔。塔は別名を多宝塔、永祥塔ともいう。清の乾隆年間の再建という。八面の磚(せん、瓦)塔、寺の西園にある浣花池、玩月池、吳王井、智穂井があり、娃宮の遺蹟といわれる。寺の西北に西施が琴を弾じた処がある。岩山の上に明王鏊と題して、琴台が2座ある。この地かの遠望で太湖が見え絶景といわれる。山西の南麓に金に抵抗した南宋の將軍韓世忠の墓ある。暮前に巨石ある。省級の文物保護施設である。

⑧てんぺいさん 天平山 Tianping shan

蘇州城より西へ15kmの地。靈岩と支硎山の間にある。山は高く聳えてる唐代は白雲山という。山頂平坦、又の名を天平山という。この山、石と楓と泉で知られる。これを「三絶」という。奇形の岩石あって「万笏朝天」という。明代植えた楓、秋は紅色とり「万文紅霞」という。山

中より泉水湧出「一綫泉」といい、池まで引水している。唐の陸羽が「吳中第一泉」と評す。白雲泉から「一綫矢白雲亭」,「望楓台」と石室,卓筆峰を経て山頂に至る。山徑に蟾蜍石,靈龜石,仏手石,飛來石,石羅漢などの怪石ある。山麓に飛來石等ある。山麓に又,高義園や忠烈廟,范公祠,范墓がある。

⑨こきゅう 虎丘 Hu qu

蘇州市の閶門外の山塘街にある。別名海涌山。春秋の吳王闔閭も葬られた地。埋葬後白虎がその墓石に坐っていたと伝えられる。もともと虎踞とは地形険しき処のこと,のち,「虎丘」といった。一説には丘の形が虎の坐っている形に似ているともいう。劍池,雲岩寺塔,断梁殿(二山門)断梁泉,試劍石,真娘墓,千人石,點頭石,第三泉,白蓮池などの文物がある。虎頭18景をつくる。雲岩寺は東晋に建てられ虎丘山寺とい,山麓に2寺つくられていた。唐台の李虎が武丘報恩寺と改称し,会昌年間毀し,のち,山上へ移し2寺併合した。北宋の至道年間再建し雲岩であるとした。清の康熙に虎阜禪寺と称し,現存する古建築は雲岩寺塔と断梁殿のみで,他は改築した。雲岩寺塔は別名を虎丘塔という。五代の周の顯徳6年(959)建てられた。宋の建隆2年(961)に竣工。樓閣式磚塔は高さ47.5m。明代より少し北側に傾く斜塔である。

⑩せっせいえん 拙政園 Zhuozheng Yuan

蘇州市の東北街,明の正徳年間御史(宮名,主とし官吏監察する役)の王献臣が失意の中で帰郷。別荘つくる。名を普の潘岳の「閉居賦」の「灌園鬻蔬以供朝夕之膳,是亦拙者之為政也」からとる。今は3部門に区分され,東は婦田園居遺跡といわれ1959年に増築。中央は復園といい,太平天国時忠王府として一部使用。西は補園といい広さ30畝,蘇州現存の古典園として最大の規模で「蘇州園林之冠」の称あり。園内部に水面多く園の3/5は水面面積となっている。東に蘭雪堂,秫香館,西側に鴛鴦庁,倒影楼,留听閣。中央に遠香堂,見山楼,香洲,听雨軒,小飛虹などある。古代造園の傑作といわれる。江南水郷の風光の特色が顕らわれているという。

〈蘇州の橋など〉

①ほうたいこうろきょう 宝帯公路橋 Baodai Gonglu Qiao

蘇州市区の橋,市の南3.5km。十蘇王路上にある。京杭運河跨ぐ橋。西側に澹台湖口。東側に唐の元和年間架けた53孔の宝帯橋と並行する。1930年宝帯公路橋を多孔木橋とする。1970年改修。9孔双曲連拱橋となる。全長50.4m。高さ7.6m。車道幅7m。歩道各1.5m。

②そしゅうじんみんきょう 蘇州市人民橋 Suzhou Renmin Qiao

蘇州市区の人民路の南端。京杭運河を跨ぐ。1951年改修。1977年鉄橋架設。4孔で板梁交差。全長116.2m。高さ11.1m。車道幅員16m。歩道各3m。南端西側階段。橋畔北岸停留所と内航路線棧橋。橋南部工業区。橋北部商業区。蘇州の南北を結ぶ主要幹線。

③みとうきょう 覓渡橋 Midu Qiao

蘇州市区の東南角。京杭運河を跨ぐ。1973年鉄橋架線橋。全長75m。高さ11.6m。車道幅員10m。歩道各2.5m。葑門通へ至る。橋の原名灭渡橋,灭と覓が近音で変訛。元の大徳4年(1300)初めて架ける。当時全長19mの石橋。古蹟として当時の石材路南に保存されている。灭は滅(miè)の簡略字である。

④そしゅうふうきょう 蘇州楓橋 Suzhou Qiao

「楓橋夜泊」にある。原名は封橋という。清の咸豊か10年（1860）毀されたが、同治6年（1867）アーチ型の石橋として再生。楓橋湾運河に架けられている。鉄嶺関（城内関内）の東にある。鉄嶺関は明の嘉靖36年（1557）倭寇の侵入防禦のため造られたものである。

⑤そしゅうこう 蘇州港 Suzhou Gang

蘇州市区内、江蘇省の重要港口の1つ。清の先緒22年（1896）開港。1910年蘇鎮、蘇錫、蘇常の内航港として就航。1949年輪船公司つくり21の航路貨客運搬。1970年港務管理所つくり、10の作業区に区分。主要埠頭の葑門、楓橋、双橋、婁門、斎門などを併せて整備。バスとの接続駅おいた。1972年人民橋に貨客埠頭新設。岸壁を3.3m。とし70隻（150 t級）の接岸可能とした。穀物運搬、石材、雑貨の移出し、石炭、鋼材の移入している。年間貨物扱量600万 t、旅客380万人である。

〈蘇州料理など〉

明中頃より北京で蘇州料理の分店できる。明の正徳年間武宗の朱厚照が、江南の梅竜鎮へ遊びに来て「李兄妹の店」で、女店主李鳳姐の作った鶏肉と魚のとり合わせ料理に名がないので、武宗が「遊竜戯鳳」（竜は皇帝、鳳は店主名、皇帝が鳳凰と遊ぶ、とした。）鶏肉の鶏ジーは吉（ジー）に通ずといわれる。竜鳳（おおとりは結婚の象徴であり、竜鳳とは優秀なる子弟とか、高貴な相親の譬光がある。浙江には竜遊なる県名がある。これか蘇州料理の最初といわれる。清の乾隆帝も江南で遊び、江南料理を北京で宣伝した。北京に致美楼という老舗の料理長景啓のつくったものに「鶏米鎮双竜」（鶏米鶏肉を宴の目切り、双竜はうなぎとなまこ。鎮は清の天下が永遠である願い）や「五子登料」（鶏肉、鴨肉、豚肉、魚、蝦の五色の包み）をつくった。乾隆帝は狩猟の時、いつも5人の大臣を連れていたことに困んだ。これを北京で蘇州料理といった。他に「竜鬚麵」（糸のように細い麵を油で揚げ、砂糖まぶし竜のひげのようにつくる）や「北京烤鴨」（ペキンダック）ももとは蘇州産であるといわれる。北京烤鴨（ペキンカオヤ）の烤はロースト。鴨がダックである。烤は粵語でhao²、華南でもkaoと発音する。蘇州では鴨城という。鴨子（yāzi）は吳の首都蘇州原産といわれる。春秋の「左伝」に1日2羽の鶏を供するが、時に1羽の鴨に替えた記述がある。鴨は無論家鴨（あひる）という。これが烤鴨の始まりという。春秋後期の曾侯乙の墓が湖北にあるが、家鴨の形をした漆の小函が発見されている。2000年前飼育したという。漢代の長沙の馬王推漢墓より簡冊が発見され、「家鴨の煮たもの一籠」の記述がある。三国の東吳では鬪鴨がさかんであったと謂う。魏の文帝曹丕（そうひ）は吳の君主であった孫権に使者を出して鬪鴨を求めている。一般に江南産の家鴨が京杭運河を溯上した船大工の手によって北京の料理店へ運ばれたといわれるのと、明代北京郊外の湖白湖で飼われた小白眼鴨が原料であったという説がある。遼代の帝王が都で捕えた鶏鳥と烤鴨について、白い羽根が吉祥なので飼育したともいう。明代の飼育方法には「填鴨」（てんや）という技術があったと賈思勰（かしきょう）の「齋民要術」にある。各れにして家鴨の江南原産は否定されていない。

〈そしゅうまし〉蘇州碼子 Sūzhōu Mǎzǐ 蘇州数学といわれる。中国の伝統的数字を表す符号で、1～10までを |, ||, |||, x, ㄅ, ㄆ, ㄇ, 又, 十, と書く、これを草碼ともいう。